【愛知大学短期大学部創立60周年記念事業／記録】

—短期大学部学生歌「梢の歌」の石碑や旧短大本館の建物を紹介したパネルの設置に関わって—

愛知大学短期大学部同窓会実行委員会　**山口　恵里子**
（2019 年 12 月 15 日、愛知大学豊橋キャンパス）

愛知大学短期大学部創立 60 周年記念事業として、短期大学部学生歌「梢の歌」の石碑や旧短大本館の建物を紹介したパネルの設置除幕式を 2019 年 12 月 15 日（日）に愛知大学豊橋キャンパスで開催しました。

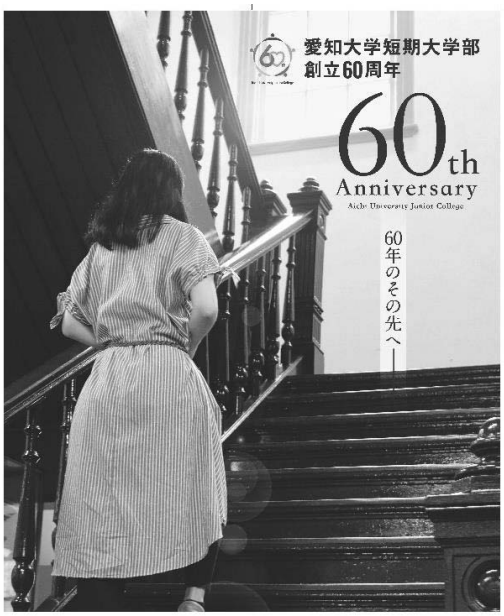
この日は、校友課主催のホームカミングデーも一緒に開催されました。

創立 60 周年記念講演に先立ち、短期大学部長の龍昌治先生から短期大学部創立 60 周年記念式典のごあいさつが以下の通りありました。

『愛知大学短期大学部は、創立 60 周年を迎えました。

1959（昭和 34）年、女子への高等教育の必要が叫ばれ、地元からの期待を背負って設置された文科につづき、1961（昭和 36）年には、生活科が増設されました。当初より、良妻賢母型の家政科ではなく、社会の一翼を担う職業人、社会人の育成をめざしたのです。音楽会を催したり、タイプライター実習を取り入れたりと、教養教育と実務教育を融合したカリキュラムでありました。とはいえ、当初は学生集めに苦労し、定員を充足することが難しかった時代が続いたそうです。

その後、ベビーブームの到来や社会の高度成長期を迎え、女子高等教育への期待から、臨時定員増に加えて、別科として英語・生活環境専修を設置するなど、拡充期を迎えます。あわせて留学生別科も設置し、多くの留学生とともに学ぶ時代がありました。学生たちの学習意欲も高く、学部 3 年次編入制度が設けられたのもこの時期でした。私事ながら、1996（平成 8）年に赴任した時には、車道校舎の大教室にあふれる受験生の多さに驚きつつ、伊良湖岬でのオリエンテーションキャンプや、日々の授業でも 2 学年で 800 人を超える学生たちとの賑やかな時代を過ごしていました。



知を愛し、世界へ。
愛知大学
AICHI UNIVERSITY

社会や産業界から短期大学への期待

の変化にともない、2005（平成 17）年に、現在の学科名となるライフデザイン総合学科へと改組しました。わずかな準備期間で、地域総合科学科としてのカリキュラムを整え、文部科学省の認定を受けることができたのは、教養教育を基盤とした歴史と、それを支える先生方の努力があったおかげです。豊かな教養科目に加え、日本文化、英語コミュニケーション、オフィス、情報、心理社会の 5 つの専門科目エリアによる自由なカリキュラム編成は、現代の諸課題に挑戦する学生たちの自主性を重んじる伝統を具現化しています。

その後の大幅な定員削減と、それに伴う教員の異動は大きな影響をもたらしましたが、昨今の周辺短大や大学の動向に反するように、順調に受験生を集め、伝統ある愛知大学の一学部として、現在に受け継がれています。60 年間で 1 万 7 千名をこえる卒業生の多くは、地元優良企業への就職のほか、愛知大学をはじめとする 4 年制大学へと進学し、良き社会人、家庭人として、社会の一翼を担っています。

60 周年を記念して、駅や電車内など各所に掲示された記念ポスターには、「60 年のその先へ―」というコピーが添えられています。その言葉どおり、これからの愛短を育て、ともに見守っていただけますよう、お願いいたします。』

（龍昌治短期大学部長・原稿より）

続いて『詩人丸山薫と「梢の歌」の世界』と題して、愛知大学短期大学部教授安智史先生が講演され、卒業生、学内関係者や学生のみならず一般の方々も含めて 100 名余りの方が丸山薫の世界・以下の「丸山薫と豊橋と「梢の歌」詩碑」に耳を傾けました。

【講演内容は P205～掲載】

詩碑除幕式が旧短大本館跡地で行われ、120 名余りの参列者がありました。学長の

あいさつをはじめに豊橋副市長、公益財団愛知大学教育研究支援財団理事長より来賓祝辞をいただきました。除幕の引綱は 2 本準備し、左右に分かれ 1 本の綱は副市長をはじめ市役所関係の皆さんで持ち、もう 1 本の綱は学長を先頭に大学関係の方にお願いして、司会の合図により一斉に綱を引き

ました。

詩碑があらわれた時は実行委員一同感動しました。愛知大学名誉教授の藤田先生からは旧短大本館の建物の歴史を紹介したパネルの内容と QR コードについて解説があり、最後に学部・短大合唱団 OG による「梢の歌」の合唱で盛り上がりました。

引き続き、逍遥館 2 階食堂へ移り、校友課主催のホームカミングデー参加者も集まり、自由にテーブルに着き一緒に祝賀会を開催しました。最初に同窓会長からお祝いのあいさつがあり、続いて愛知大学元副学長、元短期大学部長で名誉教授の黒柳先生から乾杯の音頭をいただき歓談しました。参加された方から大学や同窓会へのご意見や詩碑設置の感想など生の声をいただき、和やかで有意義な祝賀会となりました。

石碑や旧短大本館の建物を紹介したパネル設置の経緯

学生歌「梢の歌」の詩碑設置を短期大学部同窓会理事会提案

2018 年 9 月、藤城さんからお話したい事があるとお電話があり、6 日にお会いして丸山薫詩碑の話を伺いました。丸山薫の詩を読む会「鷗の会」の皆さんと 6 月中旬、「平成 30 年度丸山薫詩碑保存会総会」（丸山薫の小学校の教え子の会）に山形県米沢市岩根沢に出かけられたそうです。丸山薫記念館や周りの所どころ設置されている「丸山薫の詩のパネル」を見て巡り、パネルの前に立ち止まり皆さんと朗読をしながら、詩情に浸ったり感慨に耽ったりしたそうです。豊橋にも岩根沢にあるような丸山薫の詩のパネルがあったらいいな、そして、母校の学生歌「梢の歌」が丸山薫作詞であり、その詩が詩情豊かで、素晴らしく最高であることを岩根沢訪問時の写真を紹介されながら情熱的に話されました。

「梢の歌」の詩の内容については、学生歌といえ大学名はなく、豊橋キャンパス内のどこの情景を歌われたのかずっと疑問でした。しかし、豊橋キャンパスだけでなく丸山薫が戦争中に疎開していた岩根沢の風景もうたわれていることを感じ温かい気持ちになりました。愛大在職時には大学史の仕事に関わり、第 2 代・4 代学長の本間喜一先生の生家（山形県米沢市川西町）を訪れる機会がありました。その時の米沢の豊かな自然風景が蘇り、是非、「梢の歌」をパネルに作成し、卒業生のみならず在学生や大学を訪れる多くの方に知っていただきたいとの思いにかられました。

短期大学部同窓会常任理事でもあることから、岩根沢の見学写真をお借りし、「詩碑」作成を短期大学部同窓会行事として理事会に提案することを約束しました。

短期大学部同窓会理事会の動き

2018 年 12 月から 2019 年 2 月短期大学部同窓会常任理事会へ「梢の歌」のパネル設置の提案をしました。しかし、賛同を得られず次回審議と先送りされました。このままではいつになるのかとの焦りもあり、丸山薫自筆の「梢の歌」コピーをもとにパネル化した場合の詩碑の見積を 2 業者に依頼しました。簡易パネルだと 20～30 万円位、耐久性のある物は 50 万円位かかることをお話しました。同窓会活動の実績になることも提案しましたが、在学中に丸山薫の講義を受けているか否かの温度差や資金面の問題もあり、なかなか承認が得られず、審議が進

みませんでした。思いの外時間が経ち、何とかしたいとの思いで実行委員に手を挙げました。素晴らしい事業だと小濱さんと杉本さんに賛同していただき、最初は有志 3 人で行動し始めました。杉本さんは、一瞬で「素晴らしい、意義ある活動をしてみたい！」と心の中で思ったとのコメントを後程聞き、力になっていたことを再認識しました。

暫くして、今年が短期大学部創立 60 周年にあたり、短期大学部としても記念事業の在り方を検討していることをお聞きし、それをきっかけに支部長がやっと決断され、正式な実行委員会が立ち上がりました。丸山薫に詳しい藤城さん、若手代表の岡田さんにも快諾していただき、5 人の実行委員で本格的に取り組み始めました。

パネル作成

当初は「梢の歌」の詩碑・パネル作成だけを予定していました。2019 年 2 月 19 日付けで愛知大学短期大学部長宛に「要望書」を提出しました。愛知大学短期大学部 60 周年事業の一環として、「梢の歌」の詩をパネル作成して、設置していただきたい旨の要望書は、校友課長を通して提出しました。その後、校友課長の会田さんと何回となくやり取りを続け、5 月末にやっと回答がありました。内容は、公益財団愛知大学教育研究支援財団宛に事業費の助成要望書を提出することが好ましい旨のアドバイスをいただきました。早速、設置する石碑や旧短大本館の写真入りの建物・偕行社説明パネル、設置場所のレイアウトも決め、6 月 20 日に提出をしました。校友課からは、企画書をもとに財団の審査と並行して常任理事会、豊橋施設委員会および財務課（寄付受入）で承認していただく必要がある旨の回答でした。

60 周年事業として実施するにあたり、どうしても旧短大本館・偕行社の歴史を残したいとの思いがありました。旧短大本館が突然と取り壊されたことに心痛め、旧短大本館の面影を「ひろば」（教職員組合機関紙）に掲載したことを思い出し、パネル原稿の参考にしました。写真は短期大学部のフェイスブックから取り込みました。

パネルの校正は、東亜同文書院大学記念センターに長年携わってみえる藤田先生にお願いしました。この時先生からは、音声ガイドが設置できれば「梢の歌」を知らない訪問者もその場で聞けるから是非音声ガイドの設置を望むと、熱く語られ、素晴らし事と賛同するものの、仮見積もりの高金額やメンテナンスの面でも難しく、現状では無理との思いでした。

11 月、再校正をお願いに東亜同文書院大学記念センターに行くと藤田先生からは「詩碑だけでなく、歌を流さなくては！」と音声ガイド設置のお話が再びあり返事に困っている最中、偶然にも愛知大学同窓生で非常勤講師の高木さんが見えました。時刻表の QR コードは随時更新がされて便利との言葉に QR コードからスマートフォンで音楽を聞ける方法があることをひらめきました。その場でパネル作成業者の本間看板株式会社に電話を掛け、校友課のホームページに「梢の歌」が掲載され音楽が流れること、それを校正中のパネル原稿に QR コードを張り付けることが可能か確認しました。今まで実施したことはないが、試してみるとの返事を待つ時間の長かったこと。暫くして意外と簡単にでき、パソコンにデータ

送信をお願いしました。データを打ち出しスマートフォンをかざすと「梢の歌」のメロディーが流れた時は一同感動でした。（再校で QR コードをおまけに付けていただいた本間看板株式会社に感謝です。）

最終校正は、短期大学部長と校友課長にもお願いし、パネルを作成しました。

石嶽石工業有限会社との出会い

6 月、愛知大学同窓会岡崎支部総会に小濱さん、杉本さんと岡田さんが参加しました。当初岡崎匠の会・伝統工芸師会の和太鼓を予定していましたが、都合が悪くなり、急遽、石嶽石工業有限会社にお願いしたところ快く講演を引き受けていただきました。この偶然の出会いが、当初予定していたパネル作成だけでなく「石碑もできるよ！」と神様が微笑んでくれた気がしました。総会の翌日、「梢の歌」の歌詞を持って石嶽石工業有限会社に飛んで行き、仮見積をお願いしたと小濱さんは嬉しく語っていました。

協力金のお願い

当初は「梢の歌」のパネル設置を予定していましたが、石嶽石工業有限会社との出会いがあり、60 周年事業に相応しい「梢の歌」の石碑と旧短大本館の建物の歴史を紹介したパネルの両方を設置する方向になりました。

ご協力金のお願い文作成にあたり、詩碑作成目標額は石碑およびパネルの設置とメンテナンス料を含め、150 万円に設定しました。事業内容が分かるように石碑の形や記念碑整備工事のレイアウト・パネルの図

面そして設置する旧短大本館跡地の写真を添えました。

ご協力の発送先は、今年の理事以上の方及び過去の理事会構成メンバーにしぼり、宛名は「愛知大学を応援してくださっている皆様」として、9月2日発送しました。後日、除幕式の話を聞いた越知さん、熊澤さんや中野さんのご協力金の入金もあり、広がりを感じました。

発送したものの、「そんなに集まるのか？」との声を聴くたびに、集まらなかった場合には実行委員会で負担する話も上がりました。ご協力金額は一口いくらにするかと随分悩みました。多くの方に選択できる金額を念頭に、一口3千円、5千円、一万円、一万円以上に決めました。当初は寄付金を名目にしていましたが、負担に感じないやわらかい言葉とした方が寄付し易いとの岡田さんの提案で「ご協力金」として集めることにしました。

マスコミ・広報活動

12月6日、実行委員のメンバーで新聞社訪問を予定してところ、急遽、越知さんから声をかけていただき、中日新聞社、朝日新聞社、東海日日新聞社および東愛知新聞社に広報活動に回りました。また、豊橋市役所にも出向き、秘書課や文化・スポーツ部長、文化まちづくり課長、そして市議会議員にも除幕式の参列のご案内をしました。後日、ティーズやFM愛知にFAXを入れるなど、限られた時間の中で広報活動を行いました。

除幕式当日は、豊橋市が優れた現代詩集に丸山薫賞を贈っていることのご縁があり、豊橋副市長、文化・スポーツ部長、文化まちづくり課長、そして市議会議員の皆さんにご参列いただき交流が深まりました。

また、除幕式の様子を中日新聞は翌日16日掲載、東愛知新聞は石碑設置の様子を事前の8日に掲載、東海日日新聞は19日掲載されました。

【掲載はP269～】

除幕式

除幕式実施にあたり、講演、除幕、祝賀会の流れに沿い、大まかに分担し進めました。

最初に「除幕式ご案内」の発送先を決めました。ご案内の文書は短大同窓会協力金納入者用と愛知大学同窓会の近隣の支部長宛用とそれぞれ作成し郵送しました。ご招待の大学関係者用も作成し、ご出席いただく教職員の方々は校友課長と相談しながら決め、退職された短期大学部の先生にもご案内をしました。除幕式出席のお願いをしました豊橋市役所関係の皆さんはご参列いただきました。

何よりも除幕式の実施をどのような形式でするのか、式次第を作成しながらイメージを創り上げていきました。まず、式次第の内容に感謝の意を込めてご協力者のお名前を記させていただくことにしました。式の中心になる引綱の引き方や引く人などを皆さんで決め、前日には実行委員で予行練習をして、当日に備えました。

講演については、校友課主催のホームカミングデーと共催とさせていただき、詩碑設置に相応しい内容となりました。

祝賀会は、料理の内容を決めながら、直接生協食堂でランチをし、会場レイアウトも決めました。参加人数が締め切り後も増え続け、料理の量を心配しながら嬉しい悲鳴をあげていました。

除幕式欠席者へのご協力金のお礼

協力金を振り込まれた方で除幕式に出られなかった 48 名の短期大学部同窓生に対しては、お礼状といっしょに除幕式式次第、創立 60 周年記念品（ファイル、本「丸山薫の世界」）、新聞記事の写しを同封し郵送しました。

会　議

延べ 20 回以上の実行委員会を開催。必要に応じて FAX・電話・メールで連絡し合いました。会議は皆さんで日程調整して、主に豊橋校友課応接室で行い、時にはランチを挟みながら、和気あいあいと楽しく準備が進められて行ったことを嬉しく思いました。

順調に事が進められたのも、何よりも校友課長のサポートが大きく、実務面では発送時の宛名の打ち出しや除幕式の準備を豊橋校友課の鈴木さんにも協力していただき、本当に助かりました。実行委員一同心から感謝いたします。

会　計

当初はパネル費用を予定していましたが、石碑設置も加わり、ご協力金収入と比べながらその都度予算案を立て直し進めました。

沢山の方からのご協力と財団からの補助金により完成できました。余剰金は詩碑やパネルのメンテナンス、関連事業の基金にしたいと思います。

これからの思い

今回の活動は、実行委員が 5 人と少人数であったことから同じ目標に向かって一気に事を進められたと思います。しかし、今後は短期大学部同窓会活動の一分野として立ち上げ、詩碑のメンテナンスも含め多くの方に関わっていただき、新しい活動を模索していきたいと思います。

この同窓会活動を通して素晴らし方達との出会い、確実に根を張り築かれていった経緯が、見事に「愛知大学短期大学部創立 60 周年」に結びついたことを改めて意義深いことだと思いました。偶然の出会いが重なり、当初の予想を遙かに超えた素晴らしい詩碑やパネル設置が出来ました。

豊橋では既に「丸山薫賞」、高師緑地公園の詩碑、正太寺（丸山薫の菩提寺）、「文化のまちづくり課」、鷗の会（丸山薫の詩を読む会）等があります。

一方、大学では、短期大学部の存続自体が危ぶまれている時代です。

この詩碑設置を機会に「大学おこし」例えば、学内の歴史ある建物の所どころに学生歌も流れる QR コードパネルを設置したりしてキャンパス見学を広め帰属意識を高めること。また、丸山薫は市内外の小学校・中学校・高等学校で多くの校歌を作詞していることから、地元の人たちや関連する方にも呼びかけ交流を深め「文化のまちづくり」に繋げ、より多くの市民に関心や興味を持っていただき、大学を中心に地域と一体の文化の発信ができることを望んでいます。まず出来ることからはじめ、石碑やパネルのまわりを植栽などで整え、学生・卒業生はもとより多くの方、「丸山薫賞」授賞式関係者にも来学していただいたり、「丸山薫詩碑見学ツアー」のコースとして廻るなど、今回の「梢の歌」の詩碑・パネルの設置が大きな布石となり、旧短大本館跡地が聖地のように永久に残る事を願っています。

以 上

愛知大学短期大学部創立 60 周年記念事業
愛知大学短期大学部同窓会実行委員：

岡田理華、杉本玲子、小濱恵、山口恵里子、
藤城佐知子（左から）